

SUNTORY **B**EEER
SOUND **M**ARKET'86
IN
KARUIZAWA

JEFF **B**ECK+**S**ANTANA

FEATURING

JAN HAMMER + SIMON PHILLIPS + JIMMY HALL + DOUG WIMBISH

+**S**TEVE **L**UKATHER=!!!

3人は、6本の弦で違い音から結ばれていました。

スーパーギタリスト、夢のセッション

シェパード・ウィーヴル・センター・パントム・スタジオ・ホール・カサー(TOTO)

1986年6月1日(日)13,000席

会場: 軽井沢プリンスホテル宴会場

主催: サントリー株式会社 宣伝: フォーモーション

協力: 軽井沢100周年記念実行委員会・浅間湖沼・F&S 協力: 軽井沢町

サントリービールサウンドマーケット'86 軽井沢

軽井沢10023

JEFF BECK + SANTANA

FEATURING
IAN HAMMER + SIMON PHILLIPS + JIMMY HALL + DOUG WIMBISH

+ STEVE LUKATHER = !!!

SUNTORY BEER
SOUND MARKET'86
IN
KARUIZAWA



16歳の日に宝物を見つけた。それは今も、この手の中にある。

自らを“パンクの原点”と称してはばからないジェフ・ベックは、言葉どおりの個性的な活動で、ミュージック・シーンを常にリードしてきたギタリストだ。16歳にしてギターの道になり既に26年あまり。ジェフの活動はまさに現代ロックの歴史そのものでありながら、いつも時代を逆説的な視点で見つめてきた点で、時代の反逆児的ながりをばら蒔いている。まさしく“パンクの原点”であり、“永遠のギター青年”の尊厳がそこにある。

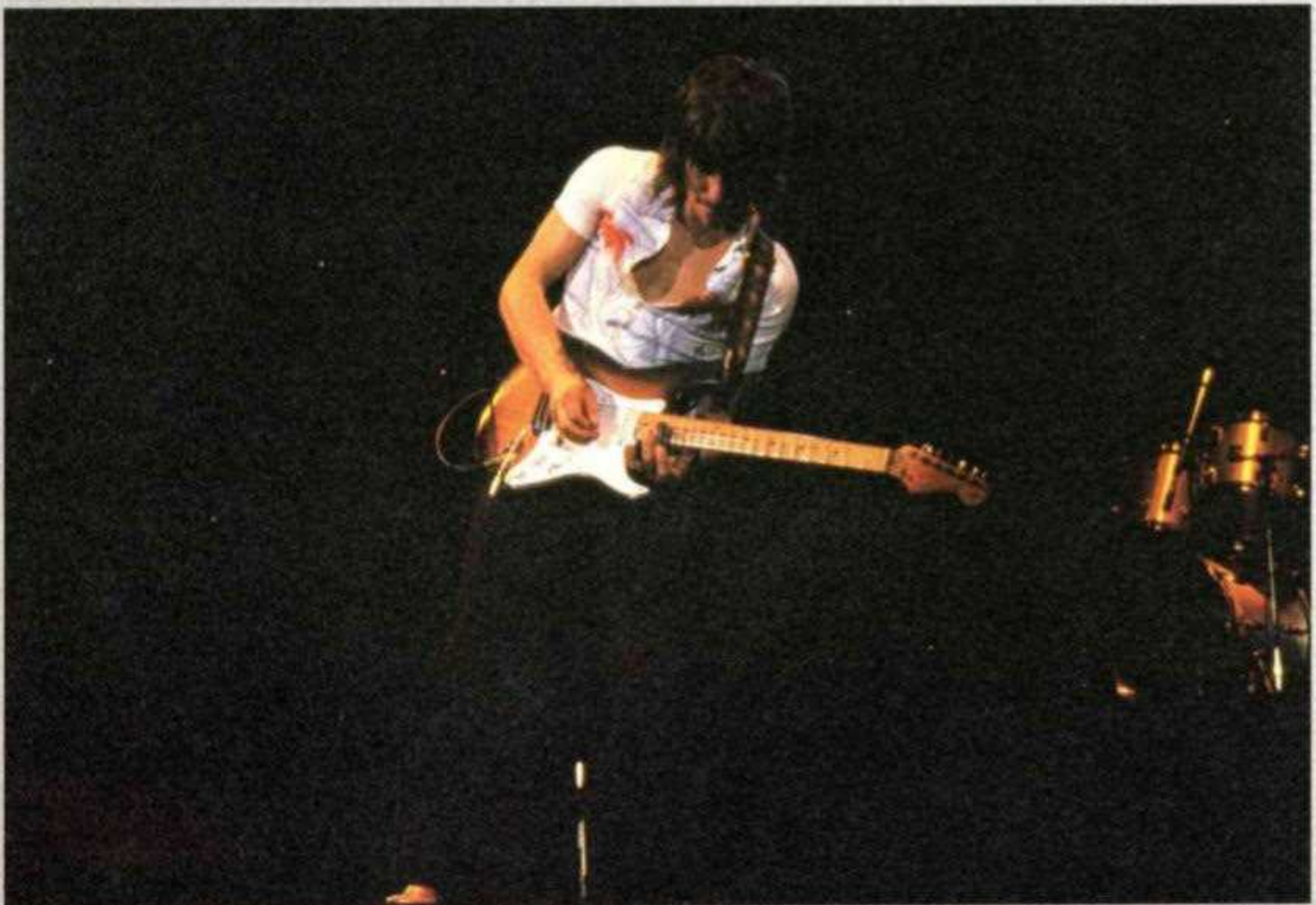
ジェフ・ベックは1944年6月24日、イギリスはサレー州ウォリントンに生まれた。ベックが初めてシーンで注目されたのはあの伝説のグループ“ヤードバース”に参加した時(65年)だった。ヤードバースはエリック・クラプトンにジェフ・ベック、ジミー・ヘイジというスーパーギタリストを生んだことで有名だ。ベックは、クラプトンの後任としてバンドの全盛期に大活躍したのだった。ベックのヤードバース時代は短く、66年12月には脱退。68年3月には自身のバンド、ジェフ・ベック・グループを結成する。彼が自身のバンド活動を続けたのは74年5月までである。

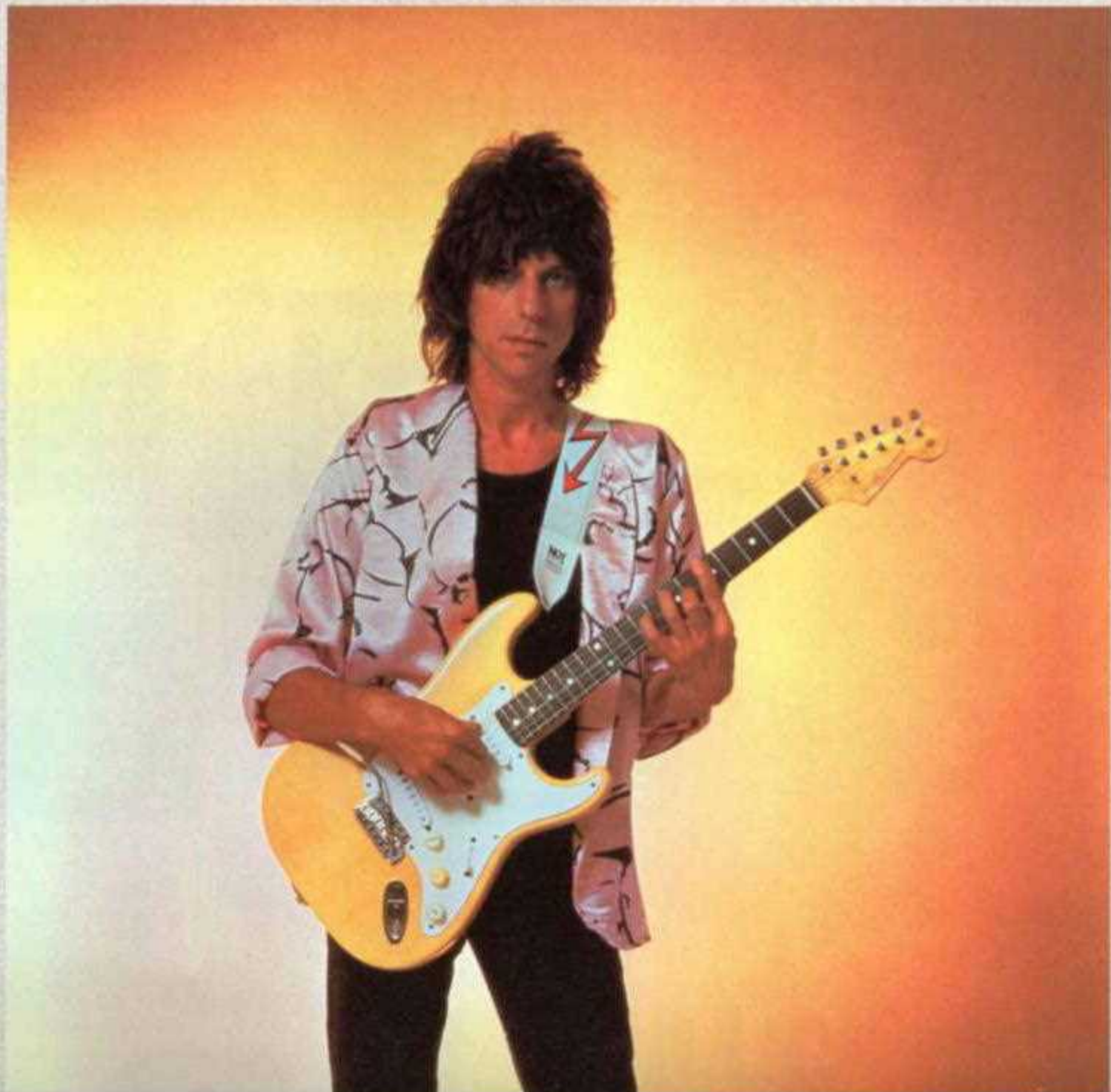
この間に、ジェフ・ベックは3つのバンドを結成している。第一期ジェフ・ベック・グループにはロッド・スチュワートがヴォーカルで参加。メンバーを一新した第二期ジェフ・ベック・グループ(71年)にはコージー・ハウエル(ドラムス)が参加していた。それぞれ2枚のアルバムを発表

したもののバンド活動は長続きせず、三度めの正産としてカーマイン・アビス(ドラムス)、ティム・ボガート(ベース)を迎えたトリオ“ベック・ボガート&アビス”を結成している。このバンドはリズム&ブルースをベースにしていたヤードバース時代から大きく前進した。いわゆる70年代ロックを彷彿させるロック的なアプローチをとっていた点で、彼の大きなターニング・ポイントとなった。ちょうど日本に初来日を果たした73年5月、このバンドの頃だ。

バンド活動に専念していたジェフも74年からはソロ活動に転向。ソロ第1弾“ブロー・バイ・ブロー”ギター殺人者の凱旋(75年)以降は、それまでのリズム&ブルースやロック性に加え更にジャズ・フレイヴァーも重視している。元マヒビシュス・オーケストラのヤン・ハマー(キーボード)と共演したソロ第3弾“ライヴ・ワイアー”は、70年代のベック芸術の集大成ともいえるべき1枚だ。以後スタンリー・クラークとの交流を深めたり、ローリング・ストーンズ参加の噂が流れるなど何かと注目を集めるが、第4弾“ゼア・アンド・バック”(80年)に至るまで3年半のインターバルがあった。その後も派手な活動をしていなかったが、84年に入りティナ・ターナー、ハニー・ドリッパースら数多くのセッションに参加。大いに話題となる。

そして、85年、N.Y.派のナイル・ロジャースやアーサー・ベイカーをプロデューサーに迎えた“フレッシュ”を発表する。旧友ロッド・スチュワートの参加も話題になったが、ダイナミックなファンク・サウンドを得てまたしても新しい魅力を開花させたのは記憶に新しい。なお来日を前に、新曲“ワイルド・シング”の録音が完了したと伝えられている。





JEFF BECK GROUP LINE UP

- | | | | |
|----|----------------|-------|-----------|
| 1) | JEFF BECK | | GUITAR |
| 2) | JAN HAMMER | | KEYBOARDS |
| 3) | SIMON PHILLIPS | | DRUMS |
| 4) | JIMMY HALL | | VOCALS |
| 5) | DOUG WIMBISH | | BASS |

日本人は、僕のスタイルをずっと支持してくれている。音楽のわかる人が多いね。

— 昨年の、「フラッシュ」発表の頃のことからきかせてください。

ベック：84年5月にN.Y.に行き、約2か月で自分のアルバムをレコーディングし、そのままN.Y.でミック・ジャガーの「シーズ・ザ・ボス」やハニードリッパーズに参加した。だから84年の半年間は非常に忙しかった。その後はロッド・スチュワートとのツアーだったけど、結局僕は6回しか一緒にやらなかった。それで84年が終わって、85年は新作を発表するための準備をして、1年があっという間に過ぎたね。つまり、まあ、バンドのメンバーを集め、こうして日本公演ができるようにしていたわけだ。

— このバンドは、日本公演だけのために組んだのですか？

J.B.：うん。

— 誰が入っているか教えてください。

J.B.：この前のツアーでもドラムスを担当したサイモン・フィリップスに、キーボードのヤン・ハマー。彼とは76、77年以來一緒にたくさんの曲をやってきた。ベースはダグ・ウィンピッシュ。N.Y.のセッション・プレイヤーだが、華麗なプレイをみせる。それにヴォーカルのジミー・ホール。

— 「フラッシュ」にも参加した、元ウェット・ウィリーの人がですね。

J.B.：うん。ずっと前から彼を使っていたと思ってたんだ。「フラッシュ」はいい機会になった。僕はとても全曲自分で歌いきれない、歌いたくない、と考えていたからね。こういう現代

的なバックアップで、彼の歌がどんな感じに聴こえるかやってみた。それがうまいって思うよ。

— 特に日本を選んだ理由はありますか？

J.B.：うん。あの、日本では、僕のスタイルをずっと支持してくれたから、元気づけられたよ。それに小さな国だから、1週間から10日ほどでかなりいろんなところを回れる。そして、大々的な宣伝などしなくても、僕の音楽を喜んで聴こうとする人達の前でプレイすることに、とても魅力を感じているんだ。

— 6月1日には、カルロス・サンタナ、ステイプル・カサーと共に特別公演が行なわれますが、この2人について、あなたの意見をきかせてもらえますか？

J.B.：カルロスは昔から、お気に入りの1人だ。ソロ・ギタリストとしてよりも、音楽がいい。60年代後半には非常に注目していたよ。民族的なリズムを人々に伝えていた。これはロックン・ロールがやるべきことだ。人々を、その精神にふれさせる。彼らはそうしながら、また先へ先へ進んでいる。ステイプル・カサーはTOTOでのプレイを思い出すね。我々と一緒にどんなプレイをするかが楽しみだね。

— まだ一緒にプレイしたことはないのですか？

J.B.：まだだが、来週彼が来るんで、彼の曲のリハーサルをやる。15分間ほどで数曲やるだけだが、その時は我々が彼のためにプレイすることになる。それからサンタナが出てきて、皆

一緒にプレイする。とても楽しくなりそうだね。

— ロッド・スチュワートと共演した「ビーブル・ゲット・レディ」も演奏する予定ですか？

J.B.：うん。ジミーだとどんな感じになるか知りたくてね。適当にやってみただけどうまくいきそうだった。あの手の曲はジミーが歌うととてもいいんだ。それに皆、ロッドがいないことはわかっているんだし、ジミーの歌いぶりを聴いてくれるはずさ。

自分の人生を売り物なんかにしたくない。とにかくマスコミはひどいな。

— もうニュー・アルバム制作にとりかかったという噂が流れてきましたが？

J.B.：うん、やってるよ。何曲かもう録ってみた。それにこれまでの未発表曲もあるし、カセットに入れて隠してある数年前からのだが、古い感じはしない。こういった曲を最終的にアルバムに入れるかどうかはわからないが、今ははっきり言えるのは、ギターがもっとたくさん入った、ワイルドなロックン・ロール・アルバムになるということだ。それが自分のものになっているところだからね。

— プライベートな生活と仕事のバランスがよくとれているようですね。

J.B.：まるでバランスがとれてない(笑)。というのは、ツアーに出ないで、プライベートな生活の側にうんと重みがかかっているから。ツア

ーの比重が少ないわけ。ツアーに出たいけれど、僕にとっては難しい状況でね。1年のうち12か月びっしりツアーをやるなんてとてもできないし、アメリカあたりでは、マスコミの注目を集めずにツアーができないんだ。アマチュアだったら、どこでプレイしようがかまわない。誰も気にもかけない。観た人が、あのバンドは凄い/と言うだけだ。これがスタートだ。その次はもっと多くの人が観ている、よりプレッシャーがかかる。それに打ち勝って、プレッシャーを感じなくなれば、またプレイしたくなる。

— プライベートな生活をすべて公表されてしまうような新しいミュージシャンがどんどん出てきているようですが。

J.B.：僕にはできないことだね。自分の人生全部が売り物にされてしまう。僕はできる限り、そういうことに巻き込まれないようにしている。いったんマスコミにプライベートな生活をかき乱されてしまったら、自分に残るものはほとんどない。一般の人は、1日のうち数分間そんな記事を見て、他人の人生を笑ったりするわけだ。数分間笑い物にしたら、あとは忘れてしまう。だが書かれた当事者は決してそれを忘れることはできない。マスコミは、人の生活にここまで立ち入るべきではないと思うね。しかもそれに勝手な解釈をつけたりして。誰だって扱ってほしい部分もあるが、こっちのマスコミはひどすぎる。

全編、ギターだけの流れる映画。そんなフィルムだったら、音楽をつくってみたいな。

— このツアーが終わったらスタジオ入りすると言っていましたね。

J.B.：それは間違いないね。アルバムか、他のレコードを作るよ。

— ロンドンのスタジオですか？

J.B.：そうなる可能性が高い。ロンドンの方がLAあたりのスタジオを借りて、皆を飛行機に乗せて連れていくよりいいからね。そんなことをしたら大変だ。一瞬一瞬が時間と金の問題だなどと思っていれば、楽しむも何ともない。だからロンドンでやった方が経済的だ。1人1人、この人は連れていこうか、どうしようか、なんてやるより、ロンドンでこの人も呼ぼう、この人もいい、といって集めたいしね。

— 車の方はどうしていますか？

J.B.：たくさんありすぎてね(笑)。すぐほりかぶっちゃうんで、1台をきれいにすると、もう別のをきれいにしなくてはならない状態だ。車って放って置かれるのを嫌うんだよ。放っておくとだめになる。さびついちゃうからね。毎日乗ってやれば大丈夫だけど、何週間も放っておくとさびて故障しかねない。だからいい状態を保つにはもの運く労力がかかる。それはかまわないんだけど、とても全部は面倒見られないんで、何台か残して、あとは手放さないと……

— 日本でのツアー中にやってみたいことはありますか？

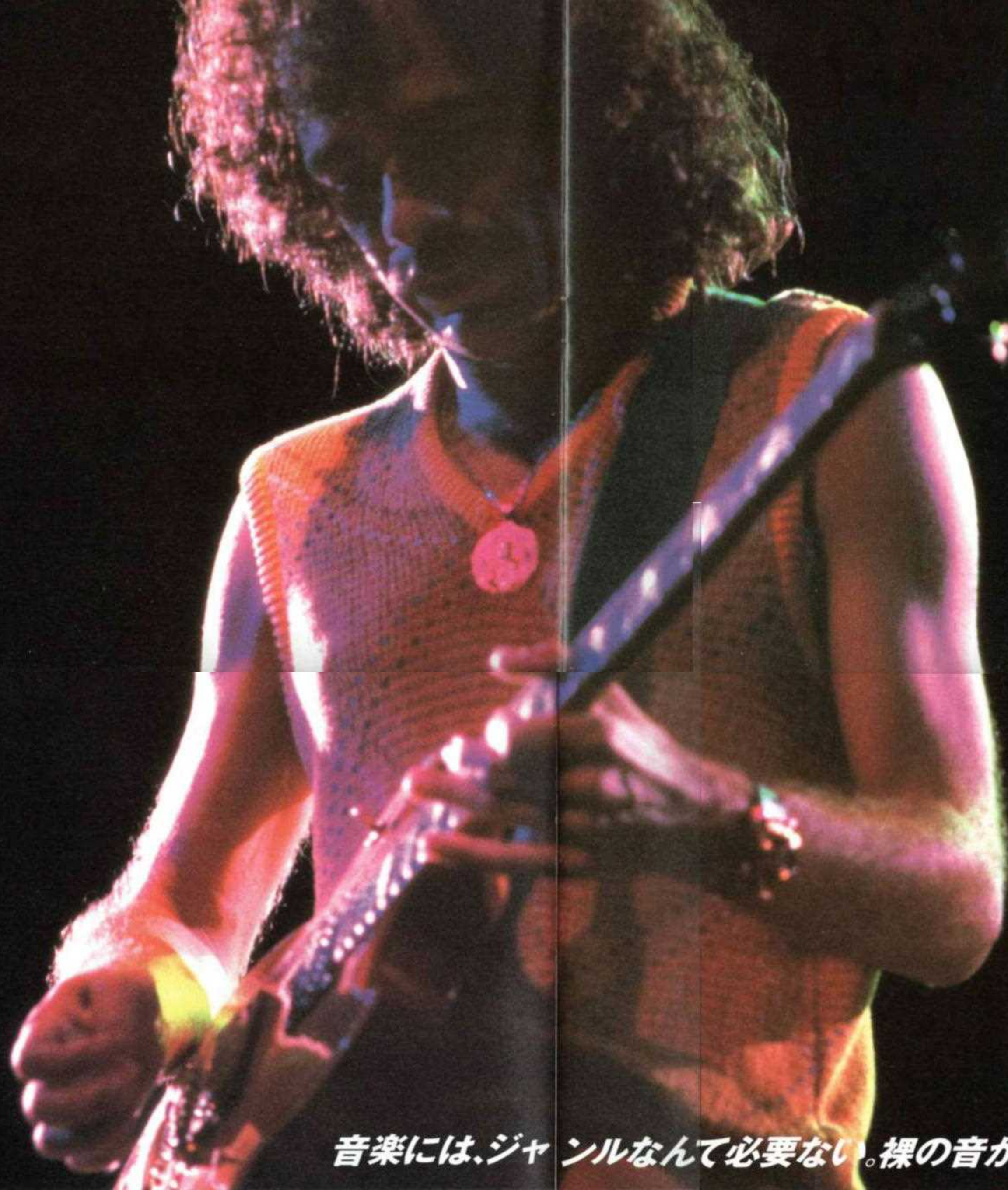
J.B.：レクリエーションで？ たどしたらわかんないな。仕事がある時は、たとえ2、3日オフがあっても、レクリエーションにいろんなことをやら

うなんて考えてられないんだ。もちろん、お寺や庭園など見て回れたらいいけど、映画観たってわかんないしね。でも日本の人がどんな風にいるかを見て、人気映画を観るのもいいかもしれない。それに、いつもとまったく違う場所に行くから、慣れるまでに何日もかかるしね。

— 映画といえば、ヤン・ハマーが「Miami Vice」の音楽を担当しましたが、あなたは映画のサウンドトラックには関心がありますか？

J.B.：僕はヤンほど器用じゃない。注文通りに作曲することなどとてもできない。ハリウッドの人間がやってきて、サウンドトラックでここはこうしたい、などと言われるのはちょっとこわい。たまたま、僕が作った曲を選んだ人がいて、3か月とか6か月あけるから、これと似たのを作ってくれ、と言われたら、やるだろう。だが1週間かそこらではね。本当のところヤンみたいな人が手助けしてくれるなら、やってみたいけれど……それと、いい映画に全編ギターのサウンドトラック、というのがあったらぜひやってみたい。

SANTOBY BEER
SOUND MARKETING
IN
KARUIZAWA
JEFF BUCH-SANTANA
STEVE LUKATHOR



CARLOS SANTANA

ラテン・ロックの代名詞にまでなった、トップ・ギタリスト。エモーショナルかつ官能的なギターの色は、ブルースやジャズ、ロックを絶妙にアレンジした。この人ならではの個性であり日本でも絶大な支持を得ている。サンタナとジェフ・ベックは、一見無関係な間柄に見えるが、両者共にジャズに傾倒したのはジョン・マクラフリンの存在が大きいらしいとされており、かつてシスコ郊外のオークランド・スタジアムで2人が共演したこともあった。今回のジョイントも2人のこだわりがあってこそ実現したものである。またラテン・ロックという代名詞をはたしても彼の存在は高く評価されており、シスコ界隈ではニール・ショーンと共にトップ・ミュージシャンの1人として変わらぬ支持を得ている。

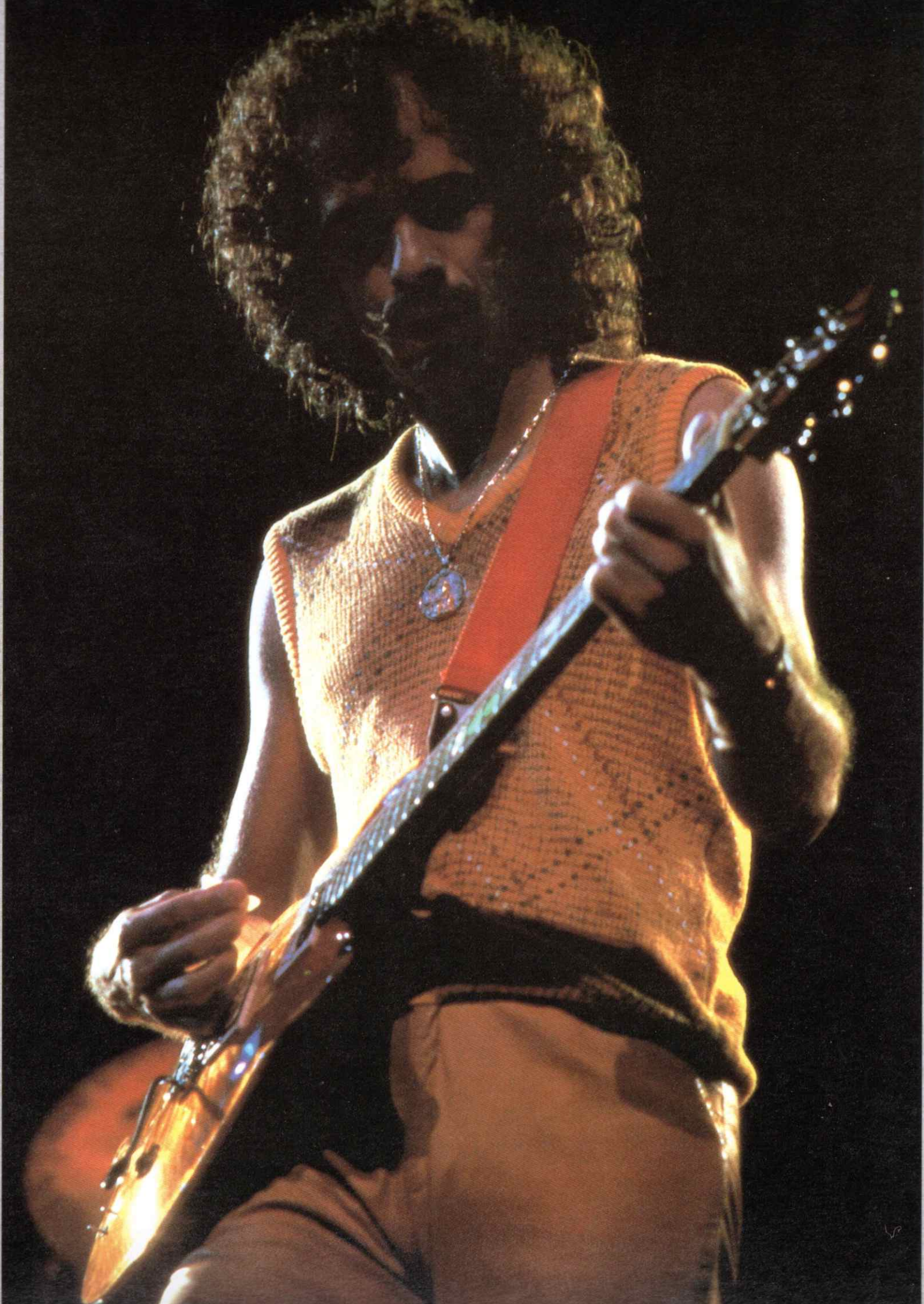
このカルロス・サンタナは1947年7月20日にメキシコのオートランで生まれた。ギターを手にしたのは8歳の頃。10代でティファナのバーでプレイしていたが、心機一転、サンフランシスコに渡りブルース・バンドを結成した。その名の通りアフロ・ラテンをベースにしたブルース風の音楽性を武器にして、シスコ周辺で絶大な人気を博す。67年にはサンタナを結成。オリジナル・メンバーはカルロスにマイク・シュリーブ(ドラムス)、グレッグ・ローリー(キーボード)、デビッド・ブラウンを含む6人編成であった。

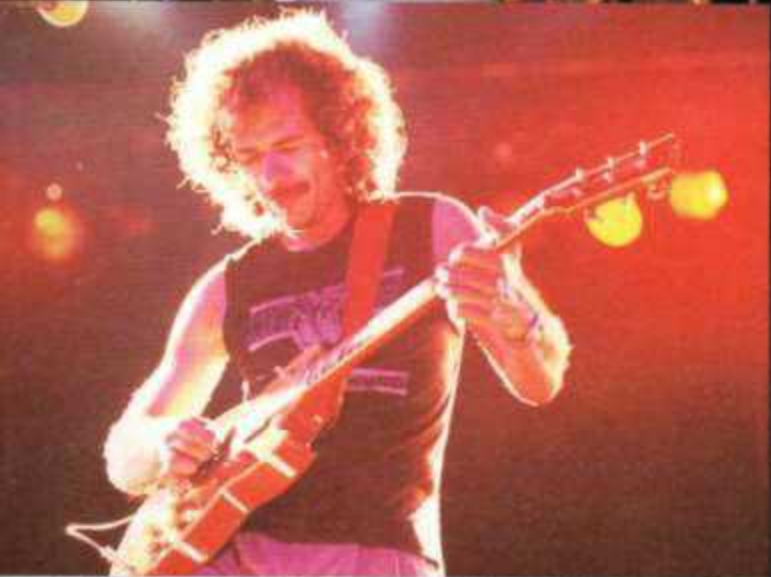
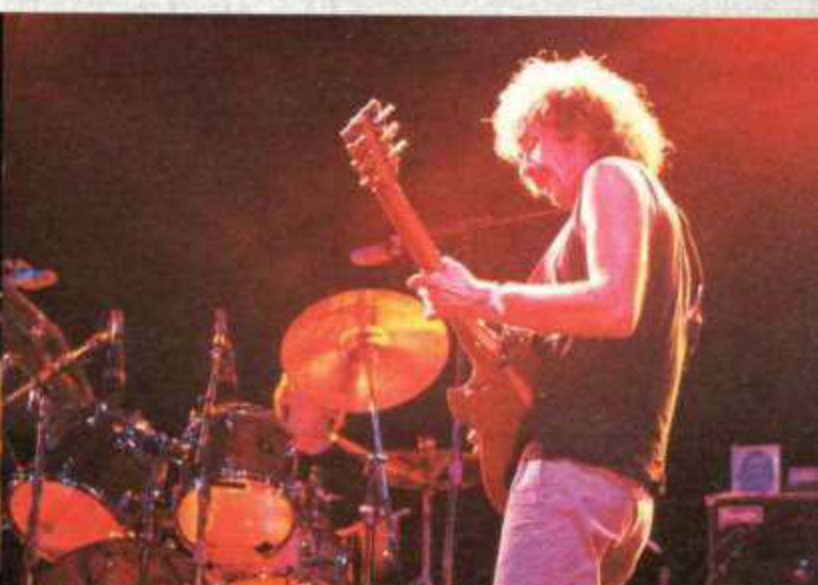
スタート時から恵まれた評価を受け、シスコで行われた「フィルモア最後の日」(68年)でデビューして、またたく間に人気バンドにノックアウトされた「ウッドストック」(69年)にも参加している。またデビュー・アルバム「サンタナ」(69年11月)はアルバム・チャートで1位を獲得しプラチナ・ディスクの認定を受けたほど。シングル・カットされた「ブラック・マジック・ウーマン」は全米で最高4位をマークしている。既にデビュー時から官能的なカルロスのギター・ソロと、それを包み込むようなムーディなサウンドは確立していたといえる。

転機が訪れたのはやはりジョン・マクラフリンやビリー・コブハム、ヤン・ハマーらのマハビッシュ・オーケストラ勢と交流を持ってからで、ソロ名義で発表した「魂の兄弟連」(73年)をターニング・ポイントに、ジャズに傾倒。いわゆるフュージョン的な音楽性を確立する。この傾向は70年代のカルロス・サンタナ・サウンドの代名詞にまでなり、マイルス・デイビスのサイド・マンだったハービー・ハンコック、トニー・ウィリアムス、ロン・カーター、ウェザー・リポート、スタンリー・クラーク、さらにブラジル音楽のアイアート・モレイラとまで共演するに至っている。またサンタナからニール・ショーンやグレッグ・ローリー、シーラ・Eの父ビート・エスコヴェドら多数のスターが生まれた。

サンタナは昨年4月に「シャンゴ」(82年)から数えて2年8か月ぶりのアルバム「ビヨンド・アピアランス」(この間カルロスのソロ「ハバナムーン」があり)を出しファンを狂喜させたばかり、従来の音楽性にポップ・ロック的なアプローチをとり新規地をみせてくれた。カルロスはウェザー・リポートのニュー・アルバムにも参加している。

音楽には、ジャンルなんて必要ない。裸の音があれば、それでいいんだ。





SANTANA BAND LINE UP

- | | | |
|----|------------------|------------|
| 1) | CARLOS SANTANA | GUITAR |
| 2) | CHESTER THOMPSON | KEYBOARDS |
| 3) | ORESTES VILATO | TIMBALES |
| 4) | RAUL REKOW | PERCUSSION |
| 5) | ARMANDO PERAZA | PERCUSSION |
| 6) | GEORGE MILES | VOCALS |
| 7) | ALPHONSO JOHNSON | BASS |
| 8) | TOM COSTER | KEYBOARDS |
| 9) | GRAHAM LEAR | DRUMS |

Songs Freedom…………… これは、僕自身を見つける ための大切なアルバムだね。

— 今度のツアーは、とてもユニークですね。あなたとジェフ・ベックとスティーブ・ルカサーの取り合わせで一緒に演るなんて。このセッションについて、どう思いますか？

サンタナ: とてもワクワクする僕だね。2人の素晴らしいギタリストと共に演れるなんて、それも特に日本で演れるなんて、意義深いことだ。

— どんな種類のステージになるのでしょうか？

S: どんな種類？ どういう意味かな…

— つまり、どんなショーになるかってこと…

S: それぞれのミュージシャンが、まず自分の曲を演って、それから全員一緒に演ると思う。だからさっさと、エキサイティングで、ソウルフル、'タマシイ'(日本語)になると思う。

— ジェフ・ベックやスティーブ・ルカサーとは、もう話されましたか？

S: いや、僕もアルバムを仕上げるのに忙しかったからね。だけど、すぐにジェフとジェフのマネージャーに会うことになっている。それで、ある試みが実現できるかどうか、はっきりする。多分、演ることになると思うよ。

— では、ニュー・アルバムについて、お聞かせ下さい。

S: 今度のアルバムの音楽は、とてもフレッシュで、個々の人間やプロデューサーについてよりも、音楽そのものに焦点を置くよう心がけたんだ。音楽により注目がいくように作ったつもりさ。人よりも、他のものに目がいくようにした点で、キャラバンサライに近いものがあるね。

— コンセプトについては？

S: コンセプト・アルバムかってこと？ ああ、確かに、そう言えるかもしれないね。それは即ち、人々の感情を奮い起こすってことだ。実際、世界には暴力や災難がたくさんあり、安らぎは、内心の世界にこそある。ちょうど仏教の寺や禅の寺で、自分自身を尋ねることができるようこのアルバムの音楽も、自らを尋ねるための支えとなるものなんだ。でなければ、みんな本質を見失っていくんじゃないかな。

— 自分自身を見つけるということですね。

S: そう。そして、それはもうすぐ行なわれると思う。

— アルバムのタイトルは？

S: Songs Freedom.
ステキなタイトルですね。

S: どうもありがとう。このタイトルにしたのは、理由があってね。アメリカには多くのアーティストがいるが、それぞれに様々な制約をうけている。そこで、このアルバムの本質的なところは、人間にとり最も大切なのは、自分自身の意見に従い、よけいなプライドなんかは捨てるべきだということを示してくれることだ。自分のハートに従うということだね。

— レコーディングは、完了したのですか？

S: ほとんど完成したよ。次の日曜には、すべて終わる。アルバムは、とてもバランスのとれた出来映えだと思う。男性にも女性にもマッチしたサウンドだ。というのは、通常、男性にしか感じ

ないハードな音楽というのはありえるが、これは男性でも女性でも感じ入るメロディが入っていて、とてもバランスのとれたサウンドになっている。

— そうした曲のアイデアは、どうして得たのですか？

S: 動として動きながら、つまり心を遠く風にかす。何というか、座って、さあ書きましょうと書いて出来た曲じゃないんだ。まずいったん、自分が書かなきゃいけないと考えているものから、自分自身を切り離し、遠く方向へ動いて行って、内心の別の声に耳を傾けるんだ。ラジオはスイッチをひねれば、他の曲に変えられるよね。それと同様に、心を静かに保って耳を傾ければ、静寂の中にまた別のサウンドが現われるんだ。日本語で何と書くか知らないけど、"invocation" (一まじない) と言って、精神に訴えかけ、呼びおこすものだと言える。

子供たちは、いつもキュート であってほしいと思う。 それを僕は日本で学んだよ。

— 日本へ来るメンバーは、このアルバムと同じメンバーですか？

S: アルマントは、1973年、初めて日本に来た時に一緒だったが、83年頃からまた一緒に演っている。ロウル・リコウとは76年以後の付き合いだ。それから、パティ・マイルスが居るんだ。彼は、ジミー・ヘンドリックスや、マイク・ブルームフィールドとも演ったことのある、とても重要なシンガーだ。アルフォンソ・ジョンソン。彼はウェザー・リポートだが、ベースを演っている。多分、やはりウェザー・リポートのトウグが、今回はドラムを演ると思う。他には、バラクーダーのトム・コスタがキーボード。

— そういったメンバーになるだろうね。
— 早くアルバムを聴きたいですね。ところで、このレコーディングを始める前は、何をしていたらよかったのですか？

S: 父親をやっていたよ。(笑) 73年以後、ずっと働きづめだったからね。今回、ほぼ1年、初めて休みをとったというわけ。5月に3歳になる息子と、1歳4ヶ月になる娘と共に、家庭的なリズムで暮らしてきたよ。(笑)。この年頃の子供というのは、インプットされていない白紙のコンピューターと同じだからね。ずっと一緒にいて、こちらから必要なものを与えてあげなければならぬ。毎日毎日、大騒動しながらも大きくなって、やがて、現在聞いた基盤に帰っていくんだ。僕の仕事は、その基盤を形造ってやることだと思う。

— 子供から何か影響を受けましたか？

S: 彼らは決まったスケジュールで動くからね。お腹が空いたらご飯を食べ、眠くなったら、ベッドに入る。つまり規律と規則正しい生活にかけては、子供はプロなんだ。彼らと一緒に過ごすことによって、時間を守る規則正しい生活、言行一致であることなどを、僕は学んだような気がする。それから、最初の娘のステラ。彼女の存在は、随分、僕に影響を与えているね。娘と父の関係って特別だろう。娘の父親とは、どうあるべきか。それが何か判ってきたんだ。ドラマーになり

たいという息子のサルバートル。母親は、やはり息子の方に魅かれるらしいよ。いずれにしろ、二人には、キュートでいてほしいと思う。このキュートということ、実は僕は日本で学んだんだけれども……。

— え？ どういうことですか？

S: 日本の人は笑顔を絶やさないからね。日本から戻ると、僕は以前よりも人間らしくなったような気がする。アメリカ人は何でも急ぎすぎて、まるで星ばかりを気にしているマクドナルドのハンバーガーみたいだ。日本では、もう少し時間をかけて、美しい庭園を作ったりしている。そこには、尊敬すべきライフスタイルが、まだあると思うね。

— でも、日本も随分変わったでしょ？

S: そうだね。アメリカの悪いところはかりを真似しているのも本当だ。確かに73年の初来日の頃に比べると、見違えるほど変化している。でも、その変化は東京以外のところでは、もっと小さいんじゃないかな。福岡や札幌、大好きな京都なんかは、長い時をかけてゆっくり変わっているけど、それは表面的な変化で、内面は一貫していると思うな。

— 今回、日本で買ったり、見たりしたいものがありますか？

S: おもちゃ、それに小さなビデオカメラが欲しい。そしたら、コンサートで、人々を撮れるだろう？(笑) 彼らを録画して、家に帰って勉強するんだ。(笑)

コンサートが終わってから 家に帰っても消えない炎。 それが、真の音楽だと思う。

— 音楽は、あなたにとって、どういう意味をもっていますか？

S: 音楽は……音楽は水で、人々は花で、僕はホースの役割さ。音楽は強さや楽しみや、賢気をもたらすけど、何よりも大きいのは、インスピレーションさ。いわゆる音楽は、エンターテインメントで、サーカスなんかと同様に楽しいものと言えるけど、僕のいう音楽は、つまり、真実の音楽は体のあらゆる部分に宿って、プラグを抜いたからって消えるものじゃない。そのまま家に帰っても、心の中にずっと残って、次にそのミュージシャンと会う時まで、ずっととどまっているんだ。

— 現在の夢は？

S: そうねえ……サンフランシスコでインターナショナル・フェスティバルを開催したいな。一週間くらい、日本の伝統音楽や、アフリカ・ブラジルの音楽、それにロシアのバレエなど国際色豊かに集めて、その合間に、B・B・キングやマイルス・デイビス、サンタナといったアメリカのミュージシャンの演奏を演る。ちょうど、モントレーのジャズ・フェスティバルみたいなものをやりたいんだけど、世界中のいろんなジャンルのミュージシャンが参加し、観客も世界各国から集まってきて、きつと素晴らしいものになると思う。そんなフェスティバルを、サンフランシスコで開くことが、僕の夢なんだよ。

(来日直前インタビュー・FM東京「サントリーサウンドマーケット」放送分より要約)

SUNTORY BEER
SOUND MARKET '86
IN
KARUIZAWA
JEFF BECK・SANTANA
+ STEVE LUKATHER



STEVE LUKATHER

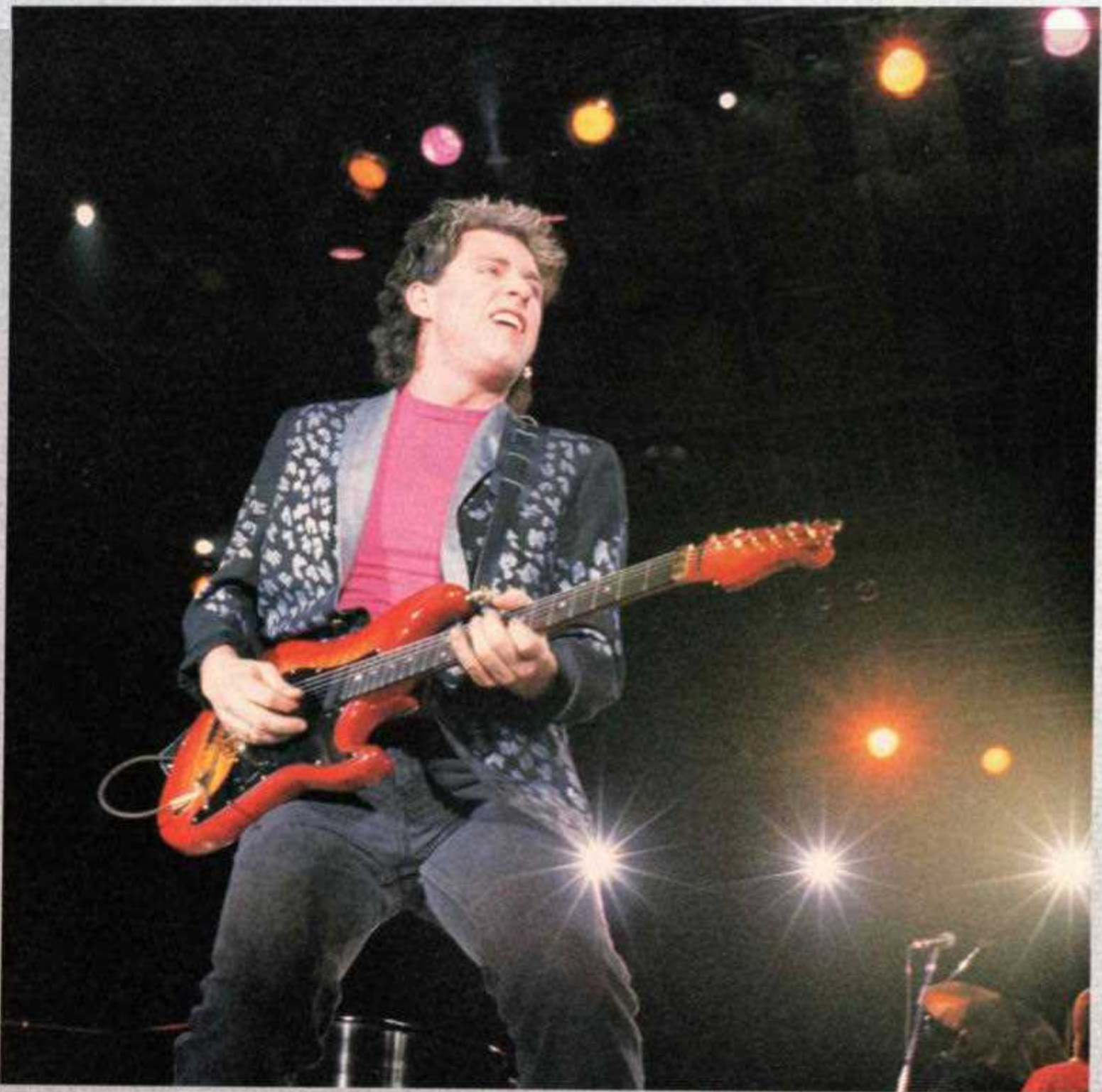
スティーブ・ルカサーが参加したグレッグ・マティソン・プロジェクトのアルバム「ベイクド・ポテト・スーパー・ライブ」に収められた「スパッド・シャッフル」は、ジェフ・ベックの「ギター殺人者の狂舞」収録の「フリーウェイ・ジャム」に基づいたシャッフルだった。この曲でルカサーはアドリブによる複雑なソロを見事にプレイ。彼の代表的なレコーディングと高く評価されている。ルカサーといえばTOTO、TOTOといえば、セッション・ミュージシャンといわれるように、彼は現在最もオールマイティな活躍で知られるギタリストである。とくれば、スタジオ・ワーカー特有の決められた音楽カラーの持主と思われがちだが、来日公演やグレッグ・マティソン・プロジェクトを例に出すまでもなく、彼はハード・ロック的かつワイルドなライブ性を重視したプレイヤーだ。

スティーブは、1957年10月21日にロサンゼルスで生まれた。7歳の時にギターを始め、ハイスクールでスティーブ・ボーカロと意気投合するこの2人に、既にバンド「スティル・ライブ」を結成していたジェフ・ボーカロとデビッド・ヘイチ、さらにジェフとデビッドと共にソニー・&・シェールのツアーをサポートしていたデヴィッド・ハンゲイトを加えた5人が、レコード・ワークを学ぶためにスタジオ・ミュージシャンとなった。これがTOTOの誕生だ。5人に加えてデビッドの推薦でヴォーカリスト、ボビー・キンボールが参加。78年にデビュー・アルバム「TOTO」を発表し、この中から「ホール・ザ・ライン」が大ヒット。彼らは一躍人気者となり、グラミー賞にまでノミネートされた。

その後のTOTOは順風満帆そのもの。「TOTO」「ハイドラ」「ターン・バック」に続き、82年に発表した第4弾「聖なる刻」からNo.1ヒット「ロザーナ」が生まれた。また第5作「アイソレーション」(84年)ではボビーに代りファーキー・フレデリクセンが加入。バックにロンドン・シンフォニー・オーケストラを迎え、ダンス・ビートを強調した「ストレンジャー・イン・タウン」をファースト・シングルに選ぶなどして、意圖的にニュー・アプローチを試みている。

スティーブ・ルカサー自身はTOTO加入前から、ボズ・スキャッグスやデビッド・フォスターとのセッションを重ねてきた人物で、ボズやフォスター関係のレコード(ホール&オーツやマーク・ジョーダンら)の常連というべき存在。代表的なセッション作はクインシー・ジョーンズの「愛のコリーダ」やマイケル・ジャクソンの「スリラー」、パープラー・ストライザンドの「ソング・バード」など、実に多岐に及んでいる。ウエスト・コースト・サウンドの要ともいっていい存在だが、ソロをとらない場合でも運んだトーンのプレイを聴かせるのは、イマジネイティブな感性があげることだ。彼の敬愛するラリー・カールトンと共に参加した松井和の「愛の黒糸録」(81年)でもリラックスしたプレイを聴かせてくれる。最近のセッションの代表作には、ファー・コーホレーションの「ディヴィジョン・ワン」がある。新ヴォーカリスト、ジョセフ・ウィリアムスを迎えたTOTOの新作が間もなく発売される予定だ。

若さは、時限爆弾みたいなもんだ。コチコチというその音が、僕のリズムになる。





STEVE LUKATHER..... GUITAR



僕の人生を変えたJ・ベック。一緒にいられるだけで、うれしくて仕方ないよ。

—では最初にあなたの最近の活動についてお聞きしたいのですが……

ルカサー：レコードを完成したばかり。つまり、TOTOの「Flying High」のことだ。7月か8月の初めにリリースされると思う。何よりヴォーカルに、作曲家ジョン・ウィリアムスの息子、ジョセフ・ウィリアムズを迎えたのが良かったね。彼は優れたミュージシャンで作曲、ヴォーカル、キーボードをこなすんだ。

—このアルバムコンセプトは？

L：昔のやり方に少し戻ったと言えるね。とてもリズムカルなアルバムだよ。音楽の素材としても、非常にバラエティに富んでいる。素晴らしいバラードもあれば、リズム主体のものもあるしね。「アフリカ」みたいな曲もある。全く同じってわけじゃないけど、これからアイデアを拝借している曲も、ハーモニーが、とても良くて、これこそTOTOってレコードだ。前作「アイソレーション」は、もっとハードなロックンロールだったけど、それはもういいって、僕ら思ったんだ。僕自身は、どっちもOKだけどね。今回、変化があったとすれば、ファーギが抜けたせいかもしれない。とにかくアルバムは出来たんだから、努力が報われればいいと思っている。

—今回のジェフ・ベックとサンタナとのセッションについては、どうですか？

L：電話で「演らないか」と言われた時にはホント驚いたよ。だって、ジェフ・ベックは僕の生活の中で、しょっちゅう聴いているアーティストだもの。ヤン・ハマーもサイモン・フィリップスも、この僕が

聞いて育って来たアーティストだし。何と言ってもベックは、僕の人生を変えたアーティストだからね。サンタナにとっても、ジェフは特別な存在だと思うよ。とにかく、それぞれが尊敬する人ばかりだから、僕にはこのセッションが本当に信じられない感じだ。日本に行ったら素晴らしいことをやろうと思うし、今から興奮しているね。日本の人は、この誰もみたことのないスゴイコンサートが観れるんだからホント、ラッキーだな。

—3人は、ご一緒にプレイなさるんですか？

L：もちろん、合計8人で、一つのバンドとして。僕とジェフ、カルロスがギター、それとヤン・ハマー、サイモン・フィリップス、フェルナンド・サンダー。あとはサンタナが自分のメンバーを連れて来るってことだ。

—ジェフ・ベックとは、すでに話されましたか？

L：ああ、1982年にロンドンのハマースミス・オデオンでね。僕らのコンサートの楽屋に、ベックが訪ねてきてくれたんだ。その後は、数年前に僕らのレコード・プランのことで話をした。とにかく一緒にいられるだけで、うれしくて仕方ない。17才の頃から憧れていた人だからね。彼みたいに偉大な人となると、つい憧れ目になってしまう。ちゃんと練習しておかなくっちゃ……

日曜の夜は小さなクラブでプレイする。お金のためじゃなく、僕自身のためにね。

—最近、「ハンド・アクロス・ザ・アメリカ」に参加されましたね。

L：「ウイ・アー・ザ・ワールド」みたいなのは少し違ったね。あれほどビッグネームばかりの参加者ってわけじゃなかった。僕らはリズムセッションとかベースになるところを演ってくれて頼まれて、じゃあいいよってことになったんだよ。まあ人助けになるからいいと思うけど、他の国の人ばかりじゃなく、自分の国の人々にも手を差し伸べなければならぬと思うな。

—ところで、仕事を終えると、何をしていますか？

L：娘と遊んでるね。11ヶ月の赤ん坊。5月13日で1歳になる。名前はクリスティーナ。それから妻のレインと過ごす。最近忙しくてちょっと時間がなかったけど、日曜の夜は2人の仲間と一緒に、楽しみだけのために、「ベイクド・ポテト」でプレイするんだ。毎回違った人々がやって来ては、座ってプレイするのさ。時々、何で音楽をやるのかと思うけどビジネスだ金だと言う前に、やっぱり音楽が好きなんだと思うよ。レコードがどれだけ売れるかなんてことを気にしないわけじゃないけど、結局は好きだからやっているんだ。80人のお客の前で、演奏するのも、好きなればこそさ。とにかく、プレイするのが楽しくてしょうがないんだよ。

—練習はしないんですか？

L：エクササイズ!? 僕が?? (どうやら、エアロビクスなんかと同速えたらしくて…)以前は、週2回ラケット・ボールをやってたけど、そんなこ

と聞かなくて、僕、太ったのかなあ。(笑)

—そんな意味じゃありませんよ。(笑)でもステージに上がるには、エネルギーがいるでしょうね。

L：そう。ロードに出るにはシェイプ・アップが必要さ。普通、夜11時頃、家に戻り、朝は7時頃スタジオに出かける。寝るのが精いっぱい、運動は無理だね。

ジョセフのことは、子供の頃から知っていたよ。でも、メンバーになるとはね……

—このグループを始められて以来、音楽に対する態度は変わりましたか？

L：ずいぶん成長したと思う。グループ自体の結果も、だんだん固く強くなって来たし。もちろん、途中、ヴォーカルが入れかわったりしたけど、3人目のジョセフは、大変いいと思うね。彼は僕らと同じ地域で育っているし、音楽一家の出身だからね。僕らには共通するカルマが多いのさ。去年一緒にプレイするまで気づかなかったんだけど、僕は高校時代に、彼の兄のマークと演ったことがあるんだ。彼は「マークの弟」って呼ばれた。それがこういう風と一緒にやるとはね。

新しいヴォーカルを僕らが探していた時に、ちょうどテープを送ってくれたのが、彼で、シカゴの新人歌手っていうから、ジェフなんかは、ジェン・ス・シェフかと思っていたりしたよ。

—それが、ジョン・ウィリアムスの息子？

L：その通り。とにかく驚いたけど、ジョセフは、ホントに面白いキャラクターをもった奴なんだ。なにせ、よく考えれば、5歳の子供の頃から知っているんだからね。25歳が若いかどうか知らないけど、彼が入ったことでTOTOに新しいエネルギーが注ぎ込まれたような気がする。彼の声はボビー・ヤファーギとも違うし、独自のスタイルを、ちゃんと持っている。以前よりもずっと多くの音楽をこなせるようになったし、レコードの幅も、かなり広がると思うよ。

常にナイスガイでありたい。それが僕のありのままの姿なんだと、思っているんだ。

—お父様が、助監督だったとの事ですが、

L：今もそうだよ。彼はテレビのCFなんかを撮ったりしている。だけど、どうしてそれを知っているの？僕は父のことはあまり話したことないんだけど。

—お父様に、何か影響を受けましたか？

L：女房に言わせれば、性格は似ているそうだよ。(笑)かんしゃく起こして大声で怒鳴るところとかね。(笑)でも、おとなしいところもあるそうで、いいところ、悪いところ両方を受けついでるんだってさ。父は偉大な人で、いつも良き父であり

続けている。よく働いていろんな面で僕を支えてくれた。両親とも、とても尊敬で、大好きだな。

—さて、では、スティーブ・ルカサーとはどういう人なんでしょう？

L：それは、僕の方が聞いてみたいねえ。(笑)まあ、とにかく、いつもナイス・ガイであるように努めているつもりだけど……よい父であるよう、正直であるよう努力しているんだ。

—自分自身について、どう思いますか？

L：僕自身を、どう思うかだって？なんて大事な質問なんだろ。誰も今まで、聞いたことがないよ。そんなの。(笑)うーん、判らないな。正直なところ、どう言えばいいか……まあ、自分らしくナイス・パーソンであろうと努力している人物といえるかな。

—では、最後に、日本のファンの皆様メッセージを。

L：そう、今回は、スゴイメンバーだから、素晴らしいものを期待してもらっていいと思う。ベックやサンタナとプレイできるのは、とても光栄なことだし、僕もみんなの期待を裏切らないエキサイティングなプレイをお見せしたいと思っています。6月1日を楽しみに待っていて下さい。

(来日直前インタビュー：FM東京「サントリーサウンドマーケット」放送分より要約)

SO LONG つか、どこかでまた会えるような気がする。

The History of Suntory Beer Sound Market

- '81 クインシー・ジョーンズ
- '82 デイヴ・ブルーシン&ドリーム・オーケストラ
- '83 喜田祐郎+南こうせつ+武田鉄矢+?
- '84 ビリー・ジョエル
- '86 ジェフ・ベック&サンタナ&スティーブ・ルカサー

Art Director : Wataru Kajita
Designer : Wataru Kajita
Copywriter : Yoshitomo Fujita
Yuki Masuda (P4, 12, 20)
Photographer : Robert Knight (PG. 7-11)
Koichiro Hibi (P3-4, 5, 14, 19-20, 21)
Seichi Kazumitsu (Cover, P7-8, 13-16, 23-24)
Naohiko Hoshino (P1-2, 33-34)
Illustrator : Wataru Kajita (P9-10)
Yasuharu Sawada (P17-18)
Special Thanks : Denton Co., Ltd.
Printer : Kotobuki Seihan Printing Co., Ltd.

SUNTORY BEER
SOUND MARKET '86
IN
KARUIZAWA
+ SANTANA
JEFF BECK
+ STEVE LUKATHER =!!!

FEATURING
TAN SANNEK + SIMON PHILLIPS + JIMMY KALL + DOUG WENZEL

